

# 「吉備津の釜」と温羅伝説

——「鬼ノ城縁起」をめぐって——

上田秋成の『雨月物語』（安永五年刊）卷三「吉備津の釜」は、怪異小説の白眉とされている。特に、鬼と化した磯良によって、誓と夥しい流血のみ残し正太郎の屍が消し去られる場面は山口剛氏以来「おそろしく、凄じい」とされている。しかしその一方で重友殿氏により、妬婦を非難する序言と男の裏切りに対する女の復讐という本話そして釜祓の正確さを説く結語の間には矛盾や不一致が見られるという欠陥も提示され、未解決のまま今日に至っている。重友説は作品の主題を妬婦の復讐と捉えるところから出発している訳であるが、果たしてそれは妥当なのであろうか。私は作品の主要舞台の備中に伝わる固有の伝承である温羅伝説に注目してみたい。なぜならその史跡の中には元結掛松（人掛松）や血吸川と呼ばれるものがあり、これ等はクライマックスシーンに於ける主要なる素材と一致するからである。本稿は、管見に及んだ温羅伝説縁起を検討し、そこから秋成の用いた可能性が最も高い縁起を「吉備津の釜」本文との共通点を指摘しつつ特定すること、更に「吉備津の釜」後半の舞台印南と伝説を生んだ古代吉備

佐々木 亨

国との関連を明らかにすること、またその縁起が有する独自性を背景に置くことによって生じ得る新たな主題の提示等を目的とし、併せて重友説の主題のとらえかたに対する修正もいささか試みてみたい。

## 一 「吉備津の釜」と温羅伝説

「吉備津の釜」と温羅伝説を関連づけんとする試みは管見の限り浅野三平、森山重雄、高田衛、横山邦治、長島弘明各氏によって行われている。しかし、浅野氏は物語と伝説そのものを繋げるのではなく、「蛇足」として「吉備津神社記」（『吉備群書集成』第五輯所収）の概略を紹介するにとどまっている<sup>3</sup>。また、横山氏は秋成が温羅を知っていた可能性は低いながらも、「作家的直観」により「先見的に撰取」したとされている<sup>4</sup>。対して森山、高田両氏は伝説自体を藤井駿氏の『吉備津神社』（『岡山文庫』52、以下『文庫』と称す）に拠りながら、森山氏は語らぬ女磯良が鬼化するプロセスを、高田氏は「一見通俗化してしまった「妬婦」鬼女」

伝承」に対し、「そのもつとも凶々しい本来の姿を現す」ため磯良と温羅を重ねたとの見解を示された。両説ともに伝説と物語双方の主人公を重ねるといふ、それまでにはない新しい見解ではあった。しかし残念ながら縁起そのものへの踏み込みは全くなされてない。さらに、両氏の利用した『吉備津神社』掲載の伝説は藤井氏も断っているように藤井氏自身が「諸異本を綜合してその神話の大要」を示したものにすぎなく根本的な問題があるろう。従つて物語と伝説の関係を論ずるに先立ち、まず縁起自体の検討を基礎作業として行う必要がある。

長島氏は縁起名を具体的に六種挙げ、伝説の紹介、物語化の検討を単に行い、『巖夜鬼城記』の二節を引きつつ鬼と化した磯良のイメージの造形に与かつた可能性が高いとされた。しかし、同氏の紹介された六種の縁起は、恐らく『神道大系 神社編三八』(以下『大系』と称す) 所収の一部に限られているようであるし、伝説自体の紹介に比べると従の扱いに止まっている。または肝心の縁起の成立期に関する言及を行つてはいない。やはり作品との接点を論ずる前に、回り道ではあるがまず縁起そのものを比較、検討するところから始めねばならない。

以下管見に及んだ縁起類を並べてみよう。成立年はカッコ内に示し、所収の文献名があればそれを続けて記した。

A

「備中吉備津宮勸進帳」(天正十一年)『岡山県古文書集』

第二編

B

「備中吉備津宮縁起」(寛文三年以前)

『大系』

「吉備津神社古記」

『備中誌』(幕末の成立)

C 「備前国々中神社記」(延宝三年)

『大系』

D 「備中吉備津宮縁起」(元禄十三年)

『大系』

E 「備中一品吉備津彦明神縁起」(享保十年以前)

『大系』

「吉備津宮縁起」

『備中誌』

F 「備中大吉備津宮略記」(文化年間)

『大系』、『備中誌』

「鬼城岩屋ノ事」(享保十五年以前)

『備中集成志大全』

(宝曆三年序)

G 「吉備津宮旧記」(寛政十一年)

『大系』

「巖夜鬼城記」

『大系』

「窟屋之記」

『大系』

「鬼ノ城縁起」

『備中誌』

「備中一宮事蹟考」

『備中誌』

H 「備中吉備津宮五社明神記」(享保十年)

『大系』

I 「備中吉備津宮御釜殿等由緒記」

『大系』

J 「備中吉備津宮修造勸進帳」(寛保年間)

『大系』

Aは現存最古のもので、室町末には伝説の骨格が成立していたことを示すもの、と藤井氏は『文庫』で解説している。さてこれらと比較、検討してゆくと以下の三グループに分類可能である。

(甲類) 温羅がイサセリに敗れ、降伏の証しとして吉備津彦の名を譲るとしているもので、AからFに共通する。

(乙類) 温羅は敗れてのち釜の底に沈められても吼えやまず、愛しい阿曾女が釜に奉仕すること十数年にして静まつたとするもので、Gの諸縁起に共通する。

(その他) 縁起とはいえないが、神道的要素が濃厚で、他の縁

起本文を部文的に引用しているもので、HからJが該当する。

甲類は神仏の対立の中で展開していったものと思われる。Bは『大系』解説にもあるように、神仏習合の要素が濃厚である。ところが同一のタイトルを有するDは神仏習合の要素が薄くなり、語句の一致は見られるもののさらに詳細なストーリー化がなされる。『文庫』では寛文三年に神社側が金山寺へ僧を追院、同七年には京都吉田神社傘下におさまったとされている。恐らくこれを契機として新たに神道の要素を盛り込んだ縁起が形成され、BからDへという書き換えが行われたのだろう。その先鞭をつけたのはCと思われる。『大系』解説に拠れば、神教分離政策を推進する池田光政が藩内の神社縁起を整備し、これを寺社奉行へ提出したものだという。この政策が隣国備中へも波及し寛文三年の事件に至ると『文庫』は指摘する。このようにして神道的要素を持つ縁起が再編される中で、ある種の完成の域にまで達したのがEである。なぜならEは、神道的要素が濃いHからJすべてに引かれているからである。実は温羅なる名称もこの縁起に全く拠っている。さらにFは和文体で記されたもので、文化の頃まで物語化は続いていた如くである。このような神仏習合の有無という違いこそあれ、温羅がイサセリに降り吉備津彦の名を譲るという点では一致している。また温羅自身を「鬼」と記したものはなく、「鬼」とされるのはその配下である。そして、温羅の愛した「安良女」が登場しない点でも一致する。例外はEだが、これは「吉備津の釜」に遅れて成立しているし、「安良女」ではなく「阿曾姫」の名称で、

温羅の会話中に一カ所見出されるにすぎない。以上の如く、甲類はあくまでも戦勝者の吉備津彦を英雄化する意図が明白で、神教分離との関連から推して神社側を中心として形成されたものと考えられる。今仮に甲類を「神社系縁起」類と呼んでおこう。

一方乙類は書名こそ異なるものの、本文はほぼ一致している。敢えていうなら「巖屋鬼城記」がやや古いものか。温羅の出自が記されていないなど物語化が少々未成熟な部分も見出せる。他は注の有無、あるいは一部の注の違いがあるのみで、同一の系統本であると同時に広く流布していたことも窺える。甲類に比しての最大の違いは温羅はイサセリに敗れても決して名を譲ることなく、釜底に沈められ愛しい安良女が仕えてもなお吼え続けるという点である。甲類が戦勝者側の縁起であったのに対して、この乙類は密かに敗者の側に立つ縁起ともいえようか。乙類は釜底に沈められた温羅の首が釜占いの起こりとする。前掲甲類Fにある以下の一節は、甲と乙との立場の違いを物語っているものといえよう。

あるふみに、御竈殿ハ温羅命をはふり奉る所にて、御気色鳴動ハ靈のならせ給ふといへり。こは国人のいひ伝ふるを、かひつけしなればにや、我家の神部の史にはをさくみえず……著者は賀陽為徳、同家は享保期までは長く筆頭神主家として君臨代々伝えられる文章類は侮れないものであったはずである。この言からしても、乙類は民間に流布していた伝承に拠ると推定される。さらに『備中集成志大全』（以下『大全』と称す）の解説によつてそれは裏付けられると同時に、縁起の成立時期までも明らかにするのである。『大全』は縁起「鬼城岩屋ノ事」を紹介した

後、これは足守藩主木下公定の命によって領内の古記数巻を整備したものとす。従つて乙類は「人掛松（元結掛松）」「血吸川」等史跡の紹介、温羅の寵愛を受けた安良女の記事といった民間伝承、姓氏伝承の色彩も認められる。そして更に注目すべき点が二つある。こゝまで一般名称の温羅を用いてはきたが、乙類での呼称は一切みられず、すべて「鬼神」または「鬼」なのである。甲類がその配下を鬼とするのとは根本的に異なる。死後の磯良造形のイメージとして温羅自身か、それとも配下かではかなりの隔たりがあろう。そしてもう一つが安良女の後継者である阿曾女失脚の件である。平城帝が神社の釜占を所望された際、阿曾女は不浄の身を偽りこれに立ち合い釜は鳴らなかつた。以後阿曾女は釜の奉仕から外された。この件も甲類に全く見出すことができない。と同時に「吉備津の釜」本文と直接重なる一節でもある。以上のことから、これ以後は乙類一仮に「民間系縁起」類と呼ぶに絞つて考察を展開してゆくこととする。

## 二 「吉備津の釜」と縁起の接点

この章では、「民間系縁起」（乙類）と作品本文との接点を具体的に追求したい。縁起本文は成立期が特定できた『大全』所収の「鬼城岩屋ノ事」（東京大学史料編纂所蔵本）を用いる。なお、縁起全文は、資料編として本稿末尾で紹介しておいたの参照されたい。さて前章でも触れた「吉備津の釜」と「民間系縁起」との接点を今一度確認しておこう。

①イサセリに滅ぼされた吉備王国の首長を「鬼神」と呼んで

いる

②「鬼神」が切り刻んだ遺骸を掛けた「人掛松」、即ち「元結掛松」の記述がある

③「鬼神」の寵愛を受けた「安良女」とその後継者である「阿曾女」が登場する

④不浄の者が立ち合つた結果、釜が鳴らなかつたという「阿曾女不改月水不浄之身此釜不鳴動」なる一節がある

①「鬼神」に関して、「神社系縁起」（甲類）では「吉備津冠者」（C）、「温羅」（D）などまちまちであるのに対して、「民間系縁起」は全て「鬼神」である。「鬼神」は雲霧を吐いて人々を迷わし、怒つて雷火を吐き、飛び駆けて人々の妻子を捕らえ、そして食い殺す。戦い敗れ首を晒されその肉を食いちぎられ、釜の奥底深く沈められても決して降ろうとはせず、また愛しい「阿曾女」を求め十二年間吼え続ける。その容貌は限りなくオニに近いが、『大全』割注に説く如く「鬼トハ神也。陰ノ靈」なのである。一方「吉備津の釜」では、物語の後半に磯良が文字通り復讐の鬼と化す。まず、嫉妬の対象である袖が「鬼化のやうに狂はしげ」になり、正太郎は磯良の「窮鬼」かと疑う。袖の死後、荒野の三昧堂で鬼女と化した磯良と再会し、陰陽師の占いによって「此鬼」は七日前に世を去つていと告げられる。死霊となつて復讐劇を完成すべく、磯良は「かの鬼も夜ごとに家を繞り或は屋の棟に叫びて。忿れる声夜まじにすさまじく「赤き光り」で責め苛む。そして仕上げではトリックを用いる。「明たるといひし夜はいまだくらく」、正太郎の目を欺きおびき出したのであった。妬

婦が鬼女に変身する話はいくらもあるが、磯良の鬼女は抜きんでた存在である。それは、やはりこの「鬼神」をモデルにしているからではないのか。烈しき、執念深き、残酷さ、そして人の目を欺く点においても両者は共通していよう。

②「人掛松」は縁起本文で用いられる古い名称である。『大全』完成本とされる片山本（宝曆七年跋）は縁起本文に先立ち以下の如くに解説している（本文引用は吉備文化研究会本による。同書に關しては後述の資料編を参照されたい）。

人掛松ノ跡ヲ継テ、往古ヨリ石垣ノ巔ニ松一本有。俗ニ元結掛ノ松ト云。其近辺ニ鬼之住シタル岩穴アリ。今ハ岩屋ト云。「元結掛松」なる名称は、更に享保期に遡って用いられていたことが『岩屋物語』によって明らかとなる。同書は半紙本二冊、明和三年鳥羽久治写、「岩屋物語」「岩屋めぐり」「岩屋の峯入り」の三部作を上下二冊にした地誌である。足守藩士が岩屋三十三観音巡りをして詠んだ和歌や発句、あるいは三十三観音の謂れ等を記してある。三十三観音の地図もあり、「鬼の城／もとゆひかけ松」と記してあること、そして享保十二年没の梅林坊俱占の発句「這寄て霞覗くや誓かけ」の存在より、享保期には既に「元結掛松」の名称の方が一般化していたことがわかる。こうした藩士の活動と藩主公定の縁起整備は時期的に当然一体のものと思わずにはなるまい。これに關しては後述したい。

「人掛松」から「元結掛松」へと呼び改められた理由は詳らかにし得ない。恐らく縁起の物語化が進行するなかで単に獲物を掛けておいたとするより、鬼神の残酷性を強調するために食い残し

の元結を掛けておいたとしたのだろう。残された髻―これこそまさに「吉備津の釜」の著名な一場面である。「明たる戸腋の壁に腥くしき血漕ぎ流て地につたふ。されど屍も骨も見えず。月あかりに見れば、軒の端にもものあり。ともし火を擧げて照し見るに男の髪の髻ばかりかゝりて。外には露ばかりのものもなし」。ここには従来さまざま典拠が当てはめられてきた。しかし、秋成の筆の凄さが典拠とされてきた諸作品に対して、その隔たりを感じさせるのみであった。鬼神が食い残した元結、それを掛けたとされる松が吉備津神社から遠からぬ地に、秋成と同時代に実在していたことは大いに注目されよう。

更に、今一つの構成要素である夥しい流血もやはり史跡として伝えられていた。縁起ではイサセリの放った矢によつて胸を射貫かれた鬼神は、大雨を降らせ川を作り、身を隠さんと飛び込むと血で真っ赤になる。イサセリは軍奉行の桑々森に命じ血を吸い尽くさせる。その一節を示せば「黒雲、巻炎；降雨如突鏢；洪水出而穿山決岩逆波流真砂。其中ニ飛入濁水忽成血腥、雷光參差而、靈渡其間為落於大海。尊命於桑々森令乾此血吸水」（傍点筆者）の如くであり、前掲『岩屋物語』ではこれが「血吸川」として伝えられている。「血」「腥」そして激しい「流」れ、いずれも物語の本文と直接関連しているのである。更に注目したいのが「雷光」と「風」である。正太郎は油断して屋外へ出たというよりも、磯良のトリックに引つ掛かったのである。即ち夜が明けたと錯覚させておびき出したのである。「髻」のみに関心が集中してきたが、このトリックも典拠の有無に付いて考察するべきであろう。その

直接の典拠は未詳ではあるが、①で既に指摘した雲霧で人の目を欺くという要素に加えて、「雷光」「風」なども大きな契機となっているのではあるまいか。「明たるといひし夜はいまだくらく。月は中天ながら影籠く」として、風冷やかに」と、秋成はトリツクを明かす。夜を欺く明るさは「雷光」によって、夜の闇は鬼神が大雨を降らす際の「黒雲」によって連想され、そしてあたりに漂う風を重ねたものと考えられようか。

③「安良女」は鬼神の寵愛を受けた阿曾の娘で、鬼神の敗北後は釜底に埋められたその軀體を見守り続けた。しかし鬼神はなお十二年の長きに渡り怨念を鎮めようとはしない。やがて釜を煮るときのみ吼えるようになったので、ここから釜祓いが起こり、阿曾の女を代々仕えさせた。従つてこの巫女を阿曾女と呼ぶに至つたとする。さてここで想起されるのが磯良命名の由来である。清田啓子氏御指摘の如く、それは海神阿度部ノ磯良から来ている。<sup>10</sup>清氏は「アソメ」と「アドベ」の音の類似に注目された。実は「阿曾」は「アゾ」と発音されるべきもので、現地では現在も然りである。従つて「阿曾女」は正しくは「アソメ」と読む。とすると、「アソメ」と「アドベ」はさらに音が類似することになり、同氏への補説とならう。しかし、両者の繋がりは単に音の類似に止まるのであろうか。鬼神が祭られる釜を守り、その叫びを取り次ぎ続けた巫女阿曾女、一方鬼神の叫びである釜祓いをシンボルとする吉備津神社で神主の娘として奥深く育まれてきた磯良、両者はタイトルでもある「吉備津の釜」そのもので繋がっているのではあるまいか。これを追求するには次の④を併せて考える必要がある。

る。

④は不浄の者が釜祓いに立ち合つた結果、釜が沈黙してしまつたという件である。これに対して「吉備津の釜」の以下の一節が想起されるはずである。「是を吉備津の釜祓といふ。さるに香央が家の事は。神の祈させ給はぬにや。只秋の虫の叢にすだくばかりの声もなし。こゝに疑ひをおこして。この祥を妻にかたらふ。妻更に疑はず。御釜の音なかりしは祝部等が身の清からぬにぞあらめ」。この一致は、秋成がこの民間系の縁起を披見した可能性が極めて高いことを示している。繰り返しになるが、この記事は民間系の縁起にしか見出し得ないのである。もし秋成がこの箇所を踏まえていたと仮定すれば、神主香央の妻はかつて起きた事件を巧みに口実として利用したことになる。続けて妻は既に結納が済んでいること、今更先方は破棄に同意しないであろうこと、そして何より娘が待ち望んでいること等を夫に力説する。すると夫は「従来ねがふ因みなれば深く疑はず」、婚礼へと進んでゆく。さて、ここで「深く疑は」なかつたものは一体何なのか。当然これは釜が鳴らなかつた原因である。実はそこが重大な運命の別れ目であるにもかかわらず、あつさり妻の口実を囁呑みにしてしまふ。それは縁起に記された事件でもあるがゆえに神主香央も落とし穴に嵌まつたとしたのだらう。この一節は重友氏によって、釜祓いに先立つて結納が交わされたという順序の不自然さが指摘された箇所であつた。確かに、釜祓いで結納の是非を決めるといふのは至極合理的な展開となるが、それでは「従来ねがふ因み」を優先させるのがあまりにも強引な犯罪となるし、釜が鳴らない

原因を「深く疑は」ないことはあり得ない。本文にもあるように神主夫妻は「猶幸を神に祈」りたかつただけなのである。即ち、祭神の御告げに傾けるべき耳を持ち得ぬ神主として設定されているのである。実際、神主香央家のモデルともされる賀陽家は、廃仏毀釈に明け暮れ、享保期には殺人事件を犯し幕府より失脚を宣告されたほどであった（この件に関しては拙稿を参照されたい）。

もともと賀陽氏は吉備の国造であり、本拠地を足守・総社から吉備津神社へ移したとされる。その足守・総社周辺にこの民間系の縁起は多く伝えられている。足守藩主木下公定がこれを編輯したのは偶然ではない。分布圏には当然阿曾も含まれている。既に指摘されるように、鋳物師の座を形成し吉備津神社に釜や鐘を奉納し、領内での特権を与えられていた技能集団の居住区域である。吉備国伝統の鉄の技術を保持し、神社から特別待遇を許されていた一団の姓氏伝承の一部が縁起に流れているのであろう。それは安良女が鬼神の寵愛を受け、阿曾女が巫女として代々釜炊いに立ち合ったとするところに象徴されよう。古代、安良女は縁起の語る如く鬼神と一身体であった。巫女は神の御告げを預かることを許され、時として神そのものが乗り移る。安良女と同郷の者に限られた所以であり、阿曾女を選ぶのは鬼神への畏敬でもあった。一方神社の奥深くで大切に育まれ、外界の汚れを知らぬ神主の娘磯良も、親はさておき当然巫女としての資格を有している。阿曾女の不敬によって途絶えてしまった鬼神との絆。その復活を願いつつ、鬼神そのものを乗り移らせた存在―それが後半部の磯良ではあるまいか。再び重友氏が提示した構想上の問題点の一つがこ

こで想起されよう。前半と後半では磯良像に分裂が見られるという指摘である。これもまた「民間系縁起」を根底に据えることにより説明が可能になると思う。即ち前半部は香央家の一人娘磯良であり、神社の奥深くで外界との接触を経験することなく静かに日々を送っていた。しかし初めて出合った外界に傷つき、命までも奪われてしまう。自分ではなく親友の命に置き換えるなら、まさに「菊花の約」の左門と一致する。左門はすぐさま敵を討つた。同様に、磯良に乗り移った鬼神が復讐を遂げた。これが後半部の磯良なのである。鬼神もまたイサセリに破れ現実に深く傷つけられ、祭ろわぬまま釜底で吼え続けているのである。繰り返すがこの釜鳴りの謂れこそ「民間系縁起」の特徴でもあった。重友氏の示した構想上の問題点は余りにも近代文学的価値意識に基づいているのではなからうか。

以上作品本文と縁起との接点を探ってみた。当然、秋成は右の縁起を知り得たかという疑問があるだろう。直接両者を繋ぐ証拠はまだ見い出せない。しかし傍証は可能である。前掲『岩屋物語』で観音巡りをして歌や句を詠んだ四人は二人が享保の、他が元文、宝暦年間の没である。その活動時期は木下公定の文化事業と合致する。即ち公定は単に縁起を整備するだけでなく、藩士を動員して史跡整備も行っていたのである。四人のうち三人が足守産だが、今一人の横斜菴孟遠は「江州彦根産」とある。彼が直接間接に伝説を上方へ結び付けた可能性もあろう。また伝説とは異なるが、同時期京都の歌人香川宣阿と岡山雅文壇を繋ぐ野村尚房の活動が、近時神作研一氏によって報告された<sup>12)</sup>。上方と備前・備

中の文人特に歌人の交流の事実からして、享保期に藩主が音頭をとって再生した伝説が、秋成の生活圏まで達していた可能性は決して低くはない。更に秋成と伝説との接点を補強すべく、次章では作品の舞台設定と縁起を生んだ古代の世界との関係を明らかにしたい。

### 三 舞台設定と伝説

「吉備津の釜」の主要舞台は前半が備中賀陽郡の庭瀬と吉備津神社、これに袖のいた柄が加わる。後半は備中から離れ播磨の印南郡に終始する。賀陽郡は無論伝説の舞台でもある。『大日本地名辞書』によれば、庭瀬はニイセとも呼ばれ、新瀬―即ち新たに開発された港を意味し、ここから足守川を遡って伝説の舞台である古代吉備国の中心地へ達したとする。とすれば、庭瀬は古代吉備国の玄関口であり、作品の冒頭部が伝説の世界への入り口をも暗示していることになる。続いて登場する吉備津神社は、無論、古代吉備国にとつてのシンボルの存在である。庭瀬から足守川を遡ると間もなく、堂々とそびえ立つ神社が見えたはずである。仮に、秋成の土地勘がないとしても、伝説さえ承知していればその中心地は明白であるし、足守・庭瀬ルートは『和漢三才図会』にも載る主要路なのである。

印南郡は作品において袖の出身地とされ、また印南野は歌枕として知られている。しかしそれだけの理由で後半の舞台として設定されたわけではない。前半が古代吉備国の中心地であるのに対して、印南郡はその東境にあたり、大和朝廷と接していた所なの

である。古代史料によつて確認してみると『古事記』考證天皇の段、イサセリ彦の吉備派遣記事に「針間の氷河の前に忌臈を据ゑて、針間を道の口と為て吉備国を言向け和し」(本文引用は大系本による。以下同様)たとされ、古代吉備国と大和朝廷は氷河即ち印南川を挟んで対峙していたことがわかる。同じく『記』景行天皇の段には吉備国と朝廷の友好関係が窺われ「吉備臣等の祖、若建吉備津日子の女、名は針間之伊那毘能大郎女を娶して」とある如く、「伊那毘」即ち印南の地を拠点とする吉備氏の娘を天皇は后に迎えていた。時代が下つても吉備氏と印南の結び付きは保たれていた。『統日本紀』巻二十六天平神護元年に、吉備津彦の子孫が馬養の造を返上し旧領印南野を姓に願ひ許される記事がある。これを受けた『三代実録』巻三十六元慶三年の記事は注目に値する。

印南野臣宗雄：笠朝臣を賜ひき。其の先は吉備武彦命より出づ。宗雄自ら言しけらく「吉備武彦命の第二男御友別命の十一世の孫人上、天平神護元年に居地の名を取りて印南野臣の姓を賜ふ。第三男鴨別命は是れ笠朝臣の祖なり。」<sup>13)</sup>

吉備と印南の結び付きはいうまでもないが、作品本文とも繋がる可能性が大きい。「吉備津の神主香央造酒が：家は吉備の鴨別が裔にて家系も正しければ」という一節は後藤丹治以来「本朝神社考」より導かれたとされた<sup>14)</sup>。対して前掲の史料は、笠・鴨別はもとより印南野まで登場し、なおかつ作品の前半と後半の舞台における結び付きをも明らかにできるのである。以上の如き印南と吉備国の強固な結び付きは、秋成の当時既に国学研究の成果として



突き止められていた。即ち、『古事記伝』巻二十一考靈天皇の段に前掲の諸史料が引かれている。また、温羅伝説を伝える縁起の中にもこれらの史料を挙げているものもある。秋成も「天津をとめ」等で結晶した古代史料への深い造詣があることはいうまでもない。『記』にもある如く印南川が古代吉備国と朝廷を隔てていた。作品において、正太郎が吉備国から京を目指しながら、袖を失い「前に渡りなく、後に途をうしなひ」としたのは印南川を意識していた証しなのではないか。正太郎は古代吉備国の勢力圏から脱出を図ったものの、東境で磯良に乗り移った鬼神の復讐に遭ったということになる。

それでは軻はどうなのか。横山氏は前掲論考で備後吉備津神社から遠からざる地としておられたが、同氏の説を少々発展させてみよう。『和漢三才図会』には備中吉備津宮から備後の同宮へ行き、更に福山・軻と回り三原に至るコースが確認できる。この辺も秋成の脳裏にあったのかもしれない。更に吉備津宮と軻との直接の繋がりを示す史料がある。備中吉備津宮正月五日の植松神社に對して前掲『備中大吉備津宮略記』はその謂れを「こは大命世に坐しとき、軻津の人松千本をたてまつれる型を、しかすることなり」と記している。藤井氏の吉備津神社分布状況調査に拠れば、軻周辺は吉備津神社の分所・遙拜所である長神社が七点もの集中をみせている。軻は古くから吉備国の傘下に入っていたものと思われる。ここは海路の要所であり備後吉備津宮へも近く、古代吉備国の西側の拠点であった。こう考えると重友氏が無性格とした袖の重要な役割が見えてこよう。袖は吉備国のシンボルである吉

備津神社の勢力圏を西から中央へ、更に東へと移動する役割を担っているのである。物語は神社の文化圏を移動しながら展開され、その象徴である釜の底から復活した鬼神が磯良の体を借りて復讐を遂げる。この作品はタイトルの如く、吉備津神社の物語であり、その象徴である釜祓いで運命を予告し結語にその正確さを置くのである。序言も「其肉を醃にする」の主語が妬婦、「其の肉」を男の方と解せば、妬婦の害を主張するのではなく「希なるためし」が、即ち男が肉を食い刻まれる話があったということになり、クライマックスシーンと呼応しよう。

以上の如く「吉備津の釜」の舞台は温羅伝説を語り伝えた吉備国そして吉備津宮と深く関連していることがわかる。土地固有の伝説を踏まえた新たな主題の提示、それは近代文学的な主題に基づく重友氏の構想上の問題点も乗り越えるものではないか。新たな主題に関して別稿を期すが、釜に沈められた鬼神に對する秋成の畏敬と考えている。かつて古代吉備国のそして神社の象徴であり、今なお吠え続けている。秋成は「白峰」の崇徳院を、「仏法僧」の秀次を、いずれもそのまま葬り去ったりはしない。現世へ怨念をはらすべく復活させている。鬼神はさらに歴史を遡った象徴的存在なのかとも思う。

#### 四 資料編 翻刻「鬼城岩屋ノ事」(東大史料編纂所蔵『備中集成志大全』所収)

該本は半紙本十五卷、各巻約五十八丁、写年時は第一巻の最終丁等に記され、明治十六年の七月から八月にかけて、徳川昭武蔵

書を修史館御用掛太田卓が校閲し、金子兼弘等が書写している。

書名は題簽に拠つた。第三巻が寺の部でその二十丁オモテに「鬼城岩屋ノ事」が記載されている。なお作者石井節了自筆完成本を片山本と呼び宝暦七年の成立、昭和十八年吉備文化研究会によつて翻刻が上梓されている。編纂所本は完成前に書写したらしい。

片山本にある完成時に付した跋文を欠き、逆に片山本では削除された宝暦三年自序が残っているからである。従つて片山本とは若干の違いが見られる。詳しくは稿を改めるとして、以下翻刻を行ふ。なお傍線部は第二章の①④に対応させて施したものである。

一、人皇七代孝靈天皇即位ヨリ五年ニ、近江国ノ湖一夜二頭ル。其夜、駿河国富士山出現スル也。然ニ此富士之影、遙徴ニ於十万里余ノ滄海。移ニ月支国ノ昆明池形。故天竺外道之住鼻山山峯々、光消而如「暗夜失」燈。波羅門大怒之而、頓毘離城ノ良群「集」隨營而、企「賊」崩富士山。故剛伽夜刃大山之中ニ隱形而、飛「来」我方国相「并」於富士山。愛鷹明神現「大人」ノ形、忽「賊」崩夜刃之為永大山。然間蘆高山如無峯而似「伏立」。明神則坐此山、鬼神甚々怒テ須臾飛「去」備陽国、楯「籠」巖夜嵩。鬼神長一丈三尺頭二八尺二圍如夜刃。而觀ノ上ニ擊肉骨體如角ノ下ニ牙生此鬼怒吐「炎」而夜々「焼」近隣山、拋「岩」而為「薪」叩「水」而為「油」。昼終日驅「飛」於備之國中、採「食」民之妻子「殺」六畜「而」為「糧」、無「万」家「而」為「樂」。此国ノ老若類「足」馳「散」四方、男女連「手」差「王」城「而」逃上。王城者如命帝國黒田邑也帝為「驚」給ヒ第一ノ尊ハ武道通達ノ有「御器」也、即吉備津彦命為「追」伐鬼神「下」給於備之國。即賀夜郡生石庄昇竜山構「城」

郭而、日日夜夜戰。

昇竜山ノ宮城東西二十四丁、西八掘三重也。外掘深十丈、搔入海湖而常ニ令「叩」波、出入無「橋」。北二ハ山時而數圍万木生出也。山ノ尾疊「石」建「高」樓、剛「苔」塞「通」路「而」也。留靈臣守之。腰ハ帶「劔」手ニハ持「鼓」示「翔」引法。今變云南ハ帶昇竜山也。尊常ニ坐「此」。其要害疎也。巖上建「萱」葺之宮。土階也。四方五町尊ノ隨臣為「并」居。故爰稱「宮」內。此昇竜山ハ、人皇一代神武天皇即位初年、數百之竜白昼上「天」。秋津洲之中竜出而上「天山」多雖「有」之、是其初也。東北ハ滄海廻「山」無「底」。長浸「青山」影「而」淵淪兮。浮「桴」通「南海」、漁「鱗」而獻「兵」糧。通「北」而「有」広郊。土芳而「有」嘉水。号「芳嘉」卿。国民住「此」辺、採「藻」摘「磯」菜、獻「兵」糧。飯盛山是也。此地世名水涌。後、円珠草「創」伽藍。武天皇八代時人号「清水」寺。又、隔「三十」余丁「西」有「夜」目山。尊ノ臣夜目丸ヲ遣而、防「夜」行ノ「惡」鬼。今謂矢部失衆々森舍人ハ一宮ノ軍奉行也。須臾翔「百里」、常有「苧」森山「守」国郡。能穿「巖」石「呼」水。此山絶頂有「岩」。衆々森守「此」岩「出」水。国民汲「此」水「潤」渴。而水于今有「中」頃。優鉢羅竜神飛「来」此山、棄「權」跡「而」護「国」郡。從來号「竜王」山也。

鬼城其高サ百二十丈、四方悉巖也。巖有「座」石。四方二丈、其岩一方如「延」著直立而高サ二丈、鬼神常「靠」此是云「座」屏。九尺上肩ノ当有「跡」。同近所「有」人掛松。外無「諸」木「皆」悉巖也。北去「二十」余丁、炊「飯」有「釜」。綱而平口也。隔「五」間「煮」人畜「有」釜。亘一丈一尺。飯釜者如「佛」像「有」鑄著。牲釜者如「鬼」形「有」鑄著。此所有「座」石。鬼神常「来」爰、愛「美」女「姪」

是。号「新山」也。此美女者阿曾庄女也。云「安良女」。鬼神初而通「此里」。愛「染於此女」。依以為「地名」。隔「二十五丁」。南鬼神軍時建「板旗」。此里号「板旗」。鬼神常居「座石」而「吐雲霧」而迷「往還之人」。降「雷火」燒「人民」。峯「青雲霧」而「谷者腥温之風起」。国民多被「捕恩愛之妻子」。失「眷屬」。紅淚正無「止期」。一宮「吉備津彦嘆思召而」。少時不安「御座」。苦列之食雜砂食給。為「不忘」民患悲也。又、鬼神之眷屬有「夜行之者」。每「夜捕」人割「手足」。掛「於巖石枯木之枝」。尊命「於染々森」而欲「討」。其形分明不為、有「前忽焉有」後。染々森或宵飛「行鬼ノ城麓」。相「待之」。誰何トハ不「知恠者出来而飛懸染々森」。兩方互「捆割相「諍之」。夜明方「拔劍」礮斬。被「斬疼所挽組而七刀刺徹」。取「首掛」獄門。此處傳ノ森ト云々其首無「髮而肉成」。瘡、口耳之辺江切通テ「一足三手也」。三手ト云々

其後軍無止期。一宮ノ御矢声ハ響「天聞者」。鬼神怒音声者飛「岩降」火。宮内鬼城相去事百余町。射箭中而喰合而落巢也。今矢喰官也。實傳部田中村氏神下事山宗其傳タル岩云々。在天ノ下成字今載有神主前新舊門ト云々。及「夜陰」射違箭不「喰合」而、鬼神之箭從「宮内」越「三十余丁」而落「箭坂」。國前内西國ノ往還尊之浮箭者鬼ノ城麓當於蛇之嵩之岩、礮飛而遙越五里余、而、止矢翔。今矢翔之里、今矢掛也。其礮岩者有今。斯然一宮之御弓勢少緩而見巢處、住吉明神化「牧童」問尊曰「上今無勝負」矢軍耳仕給者、御勢竭而為「鬼神」可亡給「笑鼻」。尊聞召而「汝如何計」宣者、牧兒曰「箭番」二筋為「射給者」。一筋者喰合、今「一筋者飛」彼可「當」鬼神之心「奉」教鼻。尊美思召即手「挟」二筋之箭、為「射給者」。果而「一筋之

箭ハ當「鬼神」之胸、齋從「座石」。真顛倒落時踏鼻足形今有「石面」。尊見「給之」拔「劍」而如「疾風」飛行給。鬼神不「叶乎思念」。四五歲之童子變「身而數千人」而難「動押」。開「盤石」而為「隱」。身其形形ノ尊如「電光激」。襲來給者鬼神終「入」石中。不「叶而」。迅雷鳴黑雲卷「炎而山河」万木震動而降「雨如突」。鏘、須臾間洩水出而穿「山決」。岩逆波流「真砂」。其中「二飛入」濁水忽成「血腥風雷光」參差而、靈「渡其間」。為「落於大海」。尊命「於染々森」令「乾」。此血吸水。鬼神通力既衰、成「鯉魚」而下鼻。作「鷓鴣」而喰揚給所建「社」。奉「崇」鯉喰官ノ實傳分也。留靈者有「鼓山」鼻。尊追「廻鬼神」。給遙見テ大膽而恐慄、西北飛去事三里余、愛而周章翊未止。大之谷之鄉而、持鼻鼓田ノ中「二打捨隱」。於高田ノ里鼻。其地飯田縣尊大怒而令「勸氣」不被「赦」出仕、剩命「染々森」不令「入」於大井川此方。染々森明神宮居「同處」擁「出世間」。

其後尊鬼神頭串串被「晒鼻」所首村是也。今傳則ノ此首經「歲月」不吐止。山河如「響也」。尊亦命「犬飼武」。此首令「喰」狗。肉尽成「觸穢」而動吠鼻間。尊炊「吾供御釜底」。可「埋」逆竈下八尺掘テ令「埋給」。加之鬼神恩愛之召「安良女」。令「燒」朝暮之火。此後十二年ハ吼呻声聞「數里」。今者煮「供御」時計吼也。至今煮「供御」女云「愛染女」。古者阿曾庄女統「火燒」之跡也。五十一代平城天皇御時被「立」勅使「煮」供御「釜一見」ノ時、阿曾女不「改」月水不淨之身、此釜不「鳴動」。從「是」神樂有「神勅」而強不「撰」。阿曾庄女、只「一生撰」月水不通女「令」燒。

吉備津彦尊ノ后宮同「坐」宮内、尊鬼城亡「鬼神」給時頻御心地煩而為「失」。染々森軍終而後斯奉「告鼻」。急飛掃給早先立而御

息絶、骸者残、官内、御靈者飯、帝都給。尊不<sub>レ</sub>堪、悲嘆、而逢、御靈、追<sub>レ</sub>翔給<sub>之</sub>、無<sub>レ</sub>程、追<sub>レ</sub>着<sub>レ</sub>從、後呼給。御靈無<sub>レ</sub>骸不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>声、応、低首<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>聞給梟。此呼給処号<sub>二</sub>呼坂<sub>一</sub>。彼低首坂也。(以下略)

(注) (1) 日本名著全集『怪談名作集』解説(昭2・10)

(2) 『吉備津の釜』の問題』等『秋成の研究』昭46・5研文書院

(3) 『吉備津の釜』考』(『女子大國文』78昭50・12)

(4) 『秋成の生活圏と『吉備津の釜』』『上田秋成全集』月報3平3・2

(5) 『幻妖の文学』上田秋成(昭57・2三二書房)

(6) 『雨月の夜の鬼たち』(『ユリイカ』昭59・8)

(7) 『幻想の宇宙』雨月物語(平7・1日本放送出版協会)

## 新刊紹介

復本一郎著

『芭蕉歳時記 豎題季語はかく味わうべし』

本書は「豎題季語」の中から主要なもの六十語について、その「本意」を明らかにするべくまとめられた。この「豎題季語」の語は筆者の造語である。これには和歌以来の伝統的季語である「豎題」と俳諧以来の季題である「横題」、さらに明治の子規

- (8) 本文引用は『上田秋成全集』による。以下も同様。  
 (9) 『吉備津の釜』出典少考』(『比較文化研究所年報』10平6・3)  
 (10) 『吉備津の釜』の磯良一命名についての報告』(駒澤大学文学部研究紀要) 28昭45・3  
 (11) 『吉備津の釜』の舞台設定―荒井と庭妹を中心に』(『研究と評論』50平8・6)  
 (12) 『二枝軒野村尚房の伝と文事』(『近代文芸』63平8・1)  
 (13) 本文引用は『訓読日本三代実録』による。  
 (14) 『雨月物語と本朝神社考との関係』(『立命館文学』昭23・3)  
 (15) 『リポート22』(昭53・11山陽放送学術文化財団)

【付記】 本稿は平成七年度日本近世文学会春季大会(於立教大学)での口頭発表に基づく。御教示下さった井上啓治氏、資料の閲覧を許可して下さい。また東大史料編纂所へ深く御礼申し上げます。

以降の季題・季語とを区別する(すなわち「豎題季語」・「横題季語」・「季語」)ことで、より深く季語を理解し味わおうという著者の主張が込められる。各項目は、まず冒頭に「豎題季語」を、中村惕齋の『訓蒙図彙』から挿絵を添えつつ、その季語を用いる芭蕉発句と共に掲げる。そして、有賀長伯の『初学和歌式』により本意を解説し、本意の形成に関わる和歌を有賀長伯の『歌林雑木抄』・山科言緒の『和歌題林愚抄』によって示す。さらに、その受容のありか

たを連歌発句で確認し、また初期俳諧(主に『犬子集』所収句)によりその滑稽化の様子を探る。最後に冒頭の芭蕉俳句に対し、本意との関連から解説を加える。すなわち、本書によれば和歌・連歌・俳諧に表現された本意の諸相を明確に理解することができる。

(平9・11 講談社選書メチエ B6判 二九三頁 一五五三円) [伊藤善隆]